

5/8  
VII-606

重度精神薄弱児に対する  
感覚遊びをとあしての集団指導の試み

東村山福祉園 高橋彰彦  
荒木禮子  
○川崎昭子

I はじめに、重度精神薄弱児たちの遊びとは、どのようなものなのかな。それは、子どもたちの日常の行動そのものを、子どもたちの生活 자체が遊びであると言えよう。

多動な子ども、じっとしていることが多い子どもなど、そのハブれも、見えるもの、聞こえるもの、触れるもので遊んでいる。すなわち、全身で遊んでいる彼らである。水あそびや、外での泥あそびを大変好む子どもたちであることがわかった。

そこで、私たちは、課題保育に、感覚遊びの中でも、触れるものを与えたいと思い、フィンガーペイントをしたり、粘土あそびをする事にした。

Ⅱ. 目的 (1) 感覚的な快感および開放感を与える。 (2) 自発性を促進させる。 (3) 保育者とのよい関係をつくる。 (4) みんなと一緒に遊び場を経験させる。

子どもたちは、これらの遊びをとあして、触ることを喜び、内面のものを外へ表わし、さまざまの欲求表現を助長することができる。そして、集団の中で遊びことの楽しさを覚え、集団活動をより促進させるものとなると考えた。

Ⅲ. 対象児 当施設、一療金の13名。(別表①参照)

Ⅳ. 方法 (1) 保育者： 平均3名、うちリーダー1名は毎回同じものとした。(交替勤務上、メンバーは固定できない)

(2) 指導方法： (A) 基本的に、保育者の働きかけについて、次のことをきめた。① 誘導する時は、歌「粉屋のおじさん」、「あはぎがあ嫁に嫁く時は」を歌い、また、「フィンガーペイントしましょ」と、ことばかけして誘う。② 自ら参

加できない子ども、触れようとしない子どもには、保育者の働きかけを積極的に行なってゆく。(ことばかけをする。歌いながら連れてくる。子どもの手に、保育者の手からペイントをつけてあげる。子どもの手をヒリ、直接ペイントに触れさせる等繰返してみる)。ただし、よくに嫌がり、拒否反応強い場合は強制しない。③ 禁止は一切しない。(口にいれる時→小麦粉で作っているので害は無い。他児の髪をひっぱる等→ペイントするよう興味を移させ、子どもの場所をかえる)。④ 一つねに子ども中心の場面とする。

(B) 教材および場の設定については、① フィンガーペイント-----テーブル上にビニールを敷き、その上でペイントする。手先にかぎらず、大きな動きができるように導く。② ボディペイント-----フィンガーペイントに或程度なれたと思われる時、子どもを軽装にして、全身での遊びへと発展するように考える。③ ドーフ粘土-----小麦粉を水でねり、サラダ油を加えて、べとつかない程度にし、薄く着色したものとする。テーブル上に置き、子どもにとらせる。また、保育者は粘土に触れながら歌をうたい雰囲気をつくる。

(3) 期間 49年2月～50年2月

時間 10時頃～11時頃(内約20～40分間)

(別表①) ども一覧表 (49.11月)

性名	性別	年令	既達年令	診断名	行動特性
1.E.T	女	7:2	0:8	てんかん	言語なし、表情乏しい
2.H.K	女	7:9	1:35	てんかん	片言の津着少しあり、躊躇なし
3.M.N	女	7:10	1:0	生後融症後遺症	言語なし 躊躇なし
4.M.M	女	7:11	1:4	仮死状態	嗚咽による表現あり
5.N.A	男	8:7	1:55	先天異常	言語なし、多動、攻击的
6.M.U	女	8:9	0:10	てんかん	歩行不安定、多動
7.K.S	男	8:10	1:3	てんかん	発声による表現あり、光を好む
8.N.H	男	9:0	0:8	てんかん	行動弱けに心配があるかない
9.Y.K	男	9:5	1:4	先天性	言語指示理解あり、(はろこ)
10.M.T	女	10:8	1:25	先天性	発声による表現、口ドボ音
11.M.T	男	11:6	1:2	先天性	おとなしい、人なつきいい
12.R.U	女	11:8	1:9	タクシ症候群	おとなしい、独立性や自立
13.Y.I	男	12:1	0:7	てんかん	やへへの関心あり

(津守式)

V. 結果 約1年間に、フィンガーペイントを12回、ボディペイントを1回、ドーフ粘土を6回行なった。これら実際経過から次の結果を見た。

(1) 全体の状況からみられたこと。「何をするのだろう」と、不安気にみながら寄ってきた子どもたちの表情と行動全体は、度重なるにつれ、保育者側の準備が始まると、「アーアー」と言つてかけ寄ってくる子どもの表現が多くなった。自分から腕まくりをしながら発声して待ち、また、他の子どもの手をとって同じようにせよと求める行動も目立った。そして、或子どもたちは、自分の遊んでいる粘土を、「どうぞ」と他児に手渡したり、受け取ったりすることができるようになった。これら遊びの集団は、全体的に明るく楽しい雰囲気をつくっていった。

(2) 初めての反応について。フィンガーペイントでは、自分からさわったもの4名、開始後4回目の時に3名が自ら触れるようになった。保育者の働きかけでさわったもの3名、うち2名はすぐ場を離れた。他の1名は、保育者の説いを、泣声をあげ、床を叩いて待った子どもで、その後は両手でさわり大きい動きとなった。

ドーフ粘土では、6名が自分から触れた。(うち1名は傍でみながら、少し吐息をもよあすが、しばらく後に指先のみでこねた。) 粘土遊びを始めて2回目に、1名が自分から手をふれ参加した。保育者の説いで、さわることができたもの2名。保育者の再度の働きかけにも嫌がり、無反応の2名であった。(別表②参照)

(3) 保育者の働きかけと反応の経過。

(別紙の資料参照)

(4) よくみられた行動。(A) フィンガーペイントでは、「手のひらでぬりたくる」、「ペタペタ叩く」、「腕をのばして大きく動かす」、

「口に入れれる」、「他人の服につける」、「指先で円を描くようにする」等が目立った。

(B) ドーフ粘土では、「手のひらでうちつける」「小さくちぎる」、「口に入れれる」、「たべる」、「細長くなつたものを振りまわす」、「投げる」等がよくみられた。

以上、いずれのときも、子どもたちの全身に喜びがあらわれてあり、笑顔と発声が多くなった。

(C) ボディペイントについて。7月に、ただ1回のみであった。8名の参加のうち、2名のものがや、消極的であったが、他は、手についたペイントを他児のからだにすりつけたり、腹ばいになって全身で遊び、声をだして喜んでいる等の3名の子どもたちの行動が目立った。

## VI 考察

(1) これら触覚教材に対する子どもたちの反応は大きく、一つの設定場面とその材料に個々が向かうことにより、集団の場がつくられていいく。他の子どもと一緒に遊ぶ経験を少しずつ学習していくとみられる。これらペインティングの場は、集まって楽しいものという気持ちを得ていく場として、とくに、発達の遅れている子どもたちに良いものと考える。

(2) 最初の反応から、個々の実際経過をみると、子どもたちは、直接に触ることによる快感をよく得ており、そして、内面のものを外界へ向けようとする感情を受けとめる保育者との生きた遊びの場が展開されてきた。この事によって、子どもたちは情緒面の落着きをみせ、新しい遊びの場へ広がっていくものと考える。また、日常の生活場面に於いても、安定期にかかわりへと広がることを思う。

(3) 生き生きとした子どもたちの全活動は、より自発的な行動へと導く。これらの遊びは、個々の自己表現活動をすすめていくものとして、障害のある子どもたちには、効果あるものと考える。

	フィンガーペイント	ドーフ粘土
自分から触れる	4名	6名
開始後 →	4回目 3名	2回目 1名
保育者の働きかけにありふれる	3名	2名
無反応	1名	2名